

連載8 「仲間づくりの場所」

20年前、A子さんは自由時間、いつでもY男さんの隣に座った。A子さんには「アイスクリーム、食べるの～」程度の発語があるが、Y男さんは全く話すことができない方だ。隣同士に座っていても、二人にはもちろん会話はない。目を見つめ合わすなんてこともあるようには見えなかった。でも寄って行って座り込むA子さんを拒否もせず逃げもせず、Y男さんはその隣に居続けた。

どう考えても、二人の間には、私たち定型発達者の尺度では計ることができない何かは流れているに違いなかった。もちろんA子さんもY男さんも、「どうしても隣同士に座っているの？」の質問には答えようがないから、その質問の答えを埋めるのは私たちの想像力しかなかった。

二人の境遇はよく似ていた。故郷がこの明星学園のある飯田市からとてつもなく遠かった。高速道が整備された今でも車で2時間ほどの距離になるから、30年以上前、入所した当時では一般道で5時間はかかっただろう。結果として帰省はお盆とお正月、面会は、運動会などの行事の時だけだった。さらに、その楽しみであるはずの帰省期間、じょうずに過ごすことができないのが二人の共通点だった。そして、ご両親は言った。「家の子は、家よりも学園の方が好きなんだと思いますよ、家に帰ってきてもちっとも落ち着かないし、ちっとも寝ることもできないし…」と。

二人は、隣同士に座って、もちろん言葉で会話することはできないから、心と心で、話していたに違いない。「また失敗しちゃったね、お家で。学園よりもお家の方が好きなのに、どうしてもいつもいつもまくいかないんだろう？寂しくなっちゃうよね。こうして一緒に座っているとひとりぼっちを忘れることができるね」と。

二人は故郷を離れて暮らすさびしさを、そしてなかなかご両親に認めてもらえな

い辛い思いを慰め合いながら、ともに支え合いながら隣に座り続けていたに違いなかった。

それから20年、今明星学園では、積極的に障害の重い方々の間で「仲間づくり」が、支援職員の手を借りながら進んでいる。

ある方が、焼き肉を食べたいと言う。今までは、「じゃあ、職員と外出して、焼肉屋さんへ行こう」だったのを、「そうだ、焼き肉って仲間で食べるとおいしいんだよね。どう？一緒に学園の食堂で焼肉会をしたいって、仲間を誘ってみようよ」と提案するのだ。招待したい仲間は、どんなに障がいの重い方でも写真カード選択することができる。職員と一緒に招待状を作る、職員の助けを借りて、招待状を届けに行く。こんな時、彼らの表情には満面の笑みがこぼれている。

彼ら同士では、その多くがしゃべることができないのであるから、誘い合うことが難しい。が、その関係づくりに支援者が介在することができるならば、「友達が欲しい」、「仲間が欲しい」気持ちを形にすることができるのだ。

このようなプロセスを踏みながら、いかに障がいのある方々が、私たち支援者に支えられているだけでなく、それ以上に、彼ら同士で支え合っていることに私たちは気づかされるのである。20年前のA子さんとY男さんの関係のように。

しかし、考えてみれば、それは当たり前のことである。「自立」していくときには、必ず両親を越える「仲間」「友達」の存在がある。障がいがあってもなくても、その姿は変わらない。誰もが同じ道を歩いているのだ。